

少年

生贄





、ガイアの子、万物の支配者よ、

我らの召喚に応じ、顕現せよ――

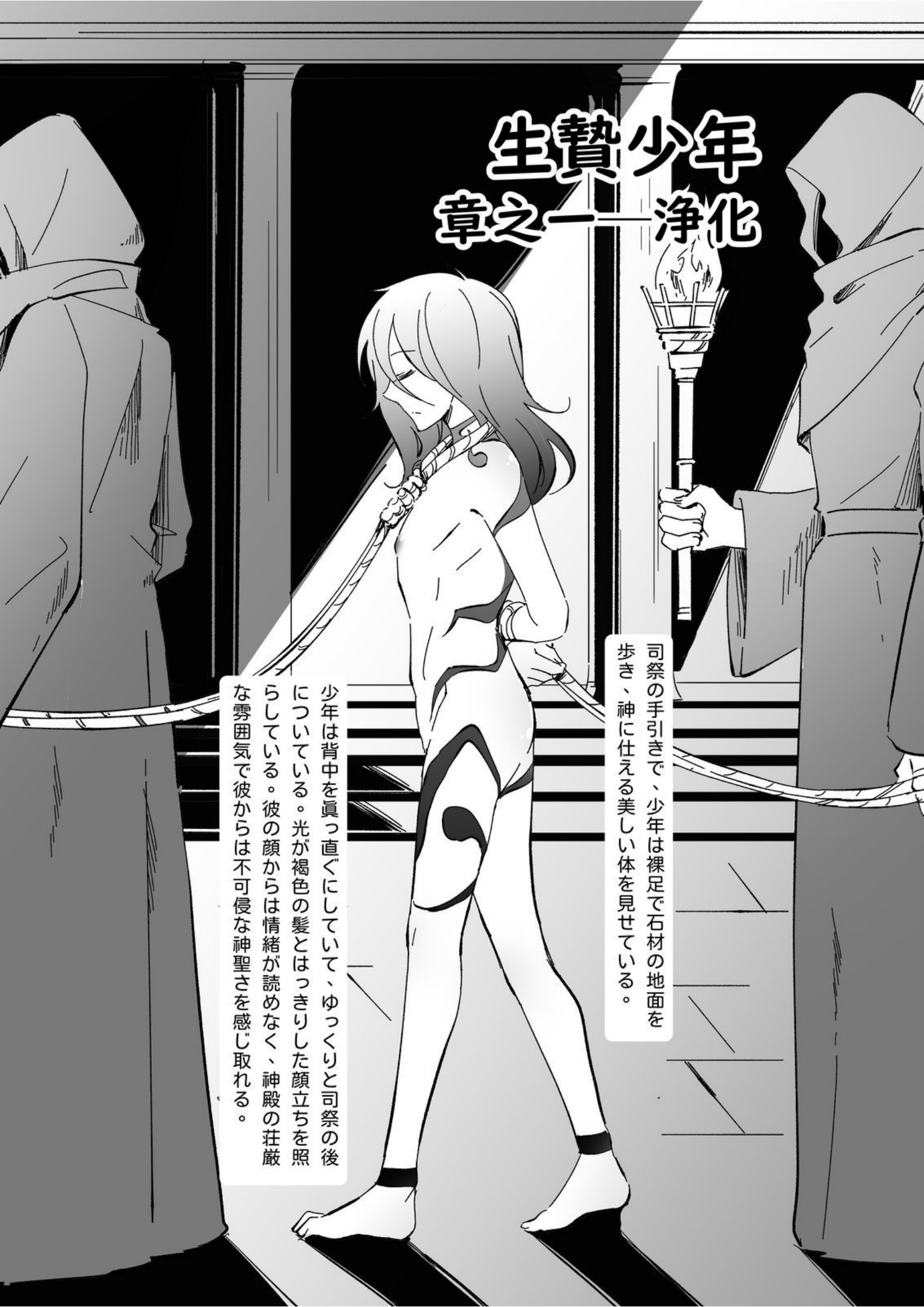
――カイン族第三皇子の名において。

少年贄生

第一章——淨化

司祭の手引きで、少年は裸足で石材の地面を歩き、神に仕える美しい体を見せている。

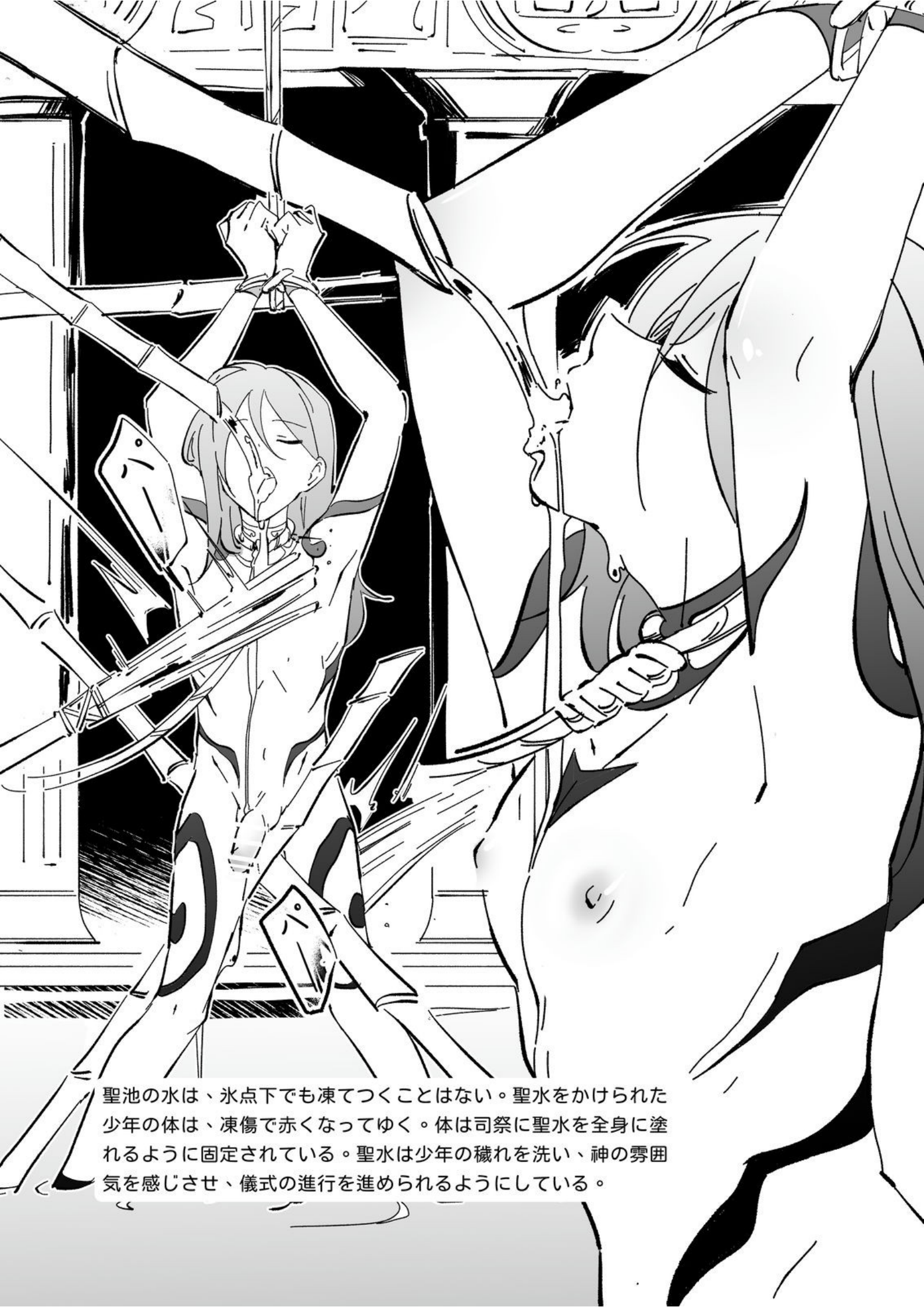
少年は背中を真っ直ぐにしている、ゆっくりと司祭の後についている。光が褐色の髪とはっきりした顔立ちを照らしている。彼の顔からは情緒が読めなく、神殿の荘厳な雰囲気では彼からは不可侵な神聖さを感じ取れる。





手、足、首の浅い傷跡を隠すためののか、入れ墨が入れられている。儀式の一環として、彼の手足の靱帯が破壊され、声帯と口内の筋肉も改造されている。助けを求められなく、逃げる方法もない、自決することすらもできなくなっている。

これから自分に訪れる苦難に、少年は抵抗せずにいる。なぜなら、生贄として、人間らしさを捨てれば捨てるほど、神に近い存在になれる。



聖池の水は、氷点下でも凍てつくことはない。聖水をかけられた少年の体は、凍傷で赤くなってゆく。体は司祭に聖水を全身に塗れるように固定されている。聖水は少年の穢れを洗い、神の雰囲気を感じさせ、儀式の進行を進められるようにしている。



浄化効果以外にも、水は催淫効果もある。吸収された聖水で、彼の体は段々と熱くなってゆく。

水は深いところまで浸透した。少年は儀式のために、数日食事をせずにした。それでもなお、衰弱している彼に、水をどんどん浴びせられ、深いところの穢れを浄化してゆく。

流れ出ている聖水が尽きるまでは、浄化は続いてゆく。水は依然少年を侵している、水を吸収した内臓は熱く鼓動する。少年はこの内からの熱を感じたことがなく、これを恥ずかしく思うこともない。しかし、微かな空気の流れが乳首と股を吹かす、熱との相乗効果でさらに刺激され、小さな悲鳴を上げた。

この熱がこれから快楽に変わってゆくと、彼は思いもしなかった。しかしその快楽がこの苦難多き儀式の中で、微かの慰めとなるだろう。

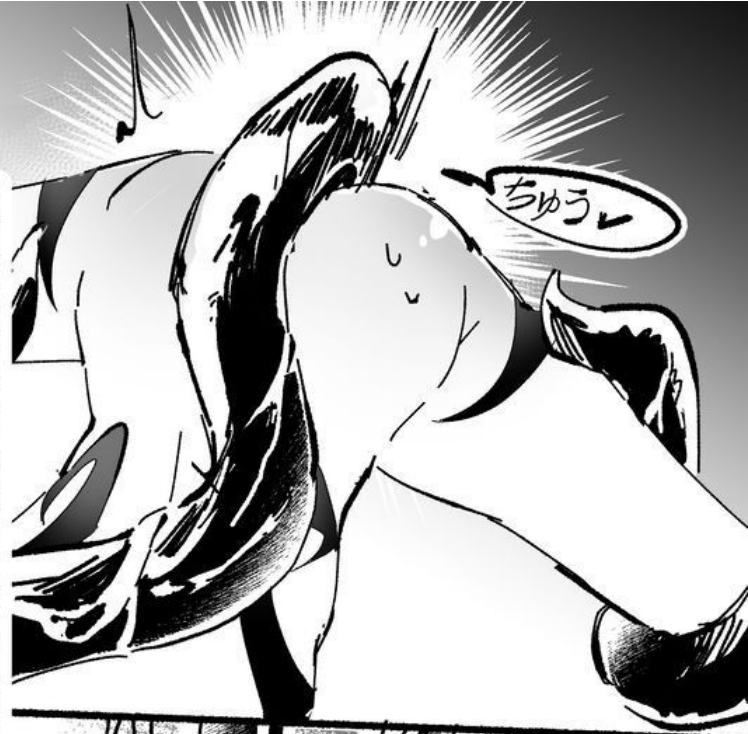


生贄少年

章之二 授卵

少年の両足は大きく開かれ、不自然な体勢で拘束されている。先ほどの水が体を熱くさせたため、胸が冷たい石板についてても寒く感じない。

司祭の禱りで、岩壁の水晶が微かに輝き、湖から巨大な触手が現れた。



触手は聖水の匂いを追って産卵口にたどり着き、表面の粘液を潤滑にしてぬるつと少年の体内に入り、探索しているような勢いで奥まで侵入した。

形無き神霊は、人を器にして、初めて実体を得られる。この世界に顕現して早百年、繁殖で栄えてきた神達は、今はこの少年を器として繁殖しようとしている。

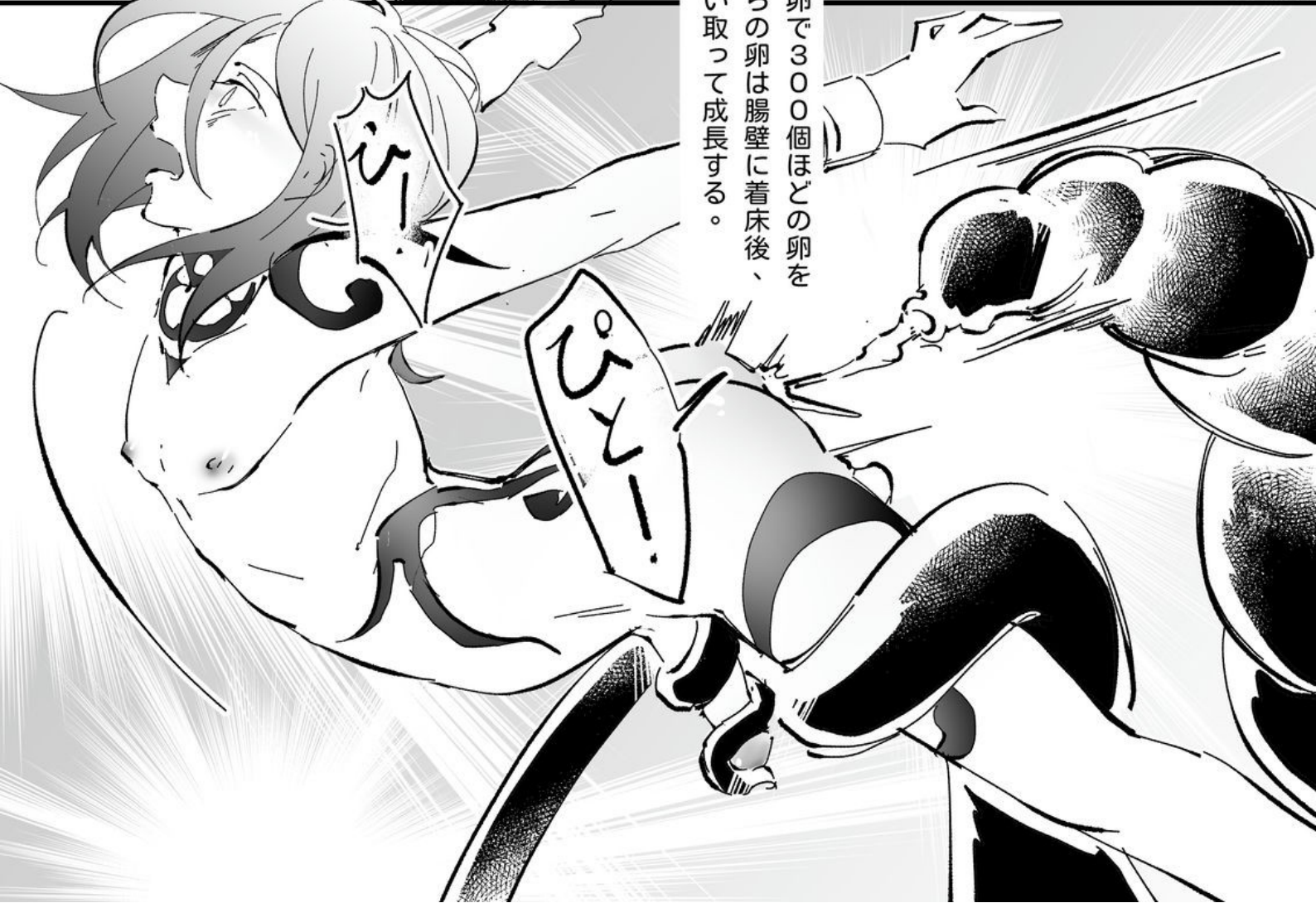


挿入、拡張、中を探られ、触手は器の状態を確認しているかのように中を掻きまわしている。見えなくてもわかる、少年は触手が自分の中で肉壁をかき分けていて、臓器を撫でられていると感じる。粘液の潤滑で痛みはあまりなく、異物が侵入されている違和感のほうが多い。



粘液が最高の潤滑液となり、ボール状の触手がすんなりと腸の奥に入ってゆく。

触手は1回の産卵で300個ほどの卵を産まれる。これらの卵は腸壁に着床後、器から栄養を吸い取って成長する。





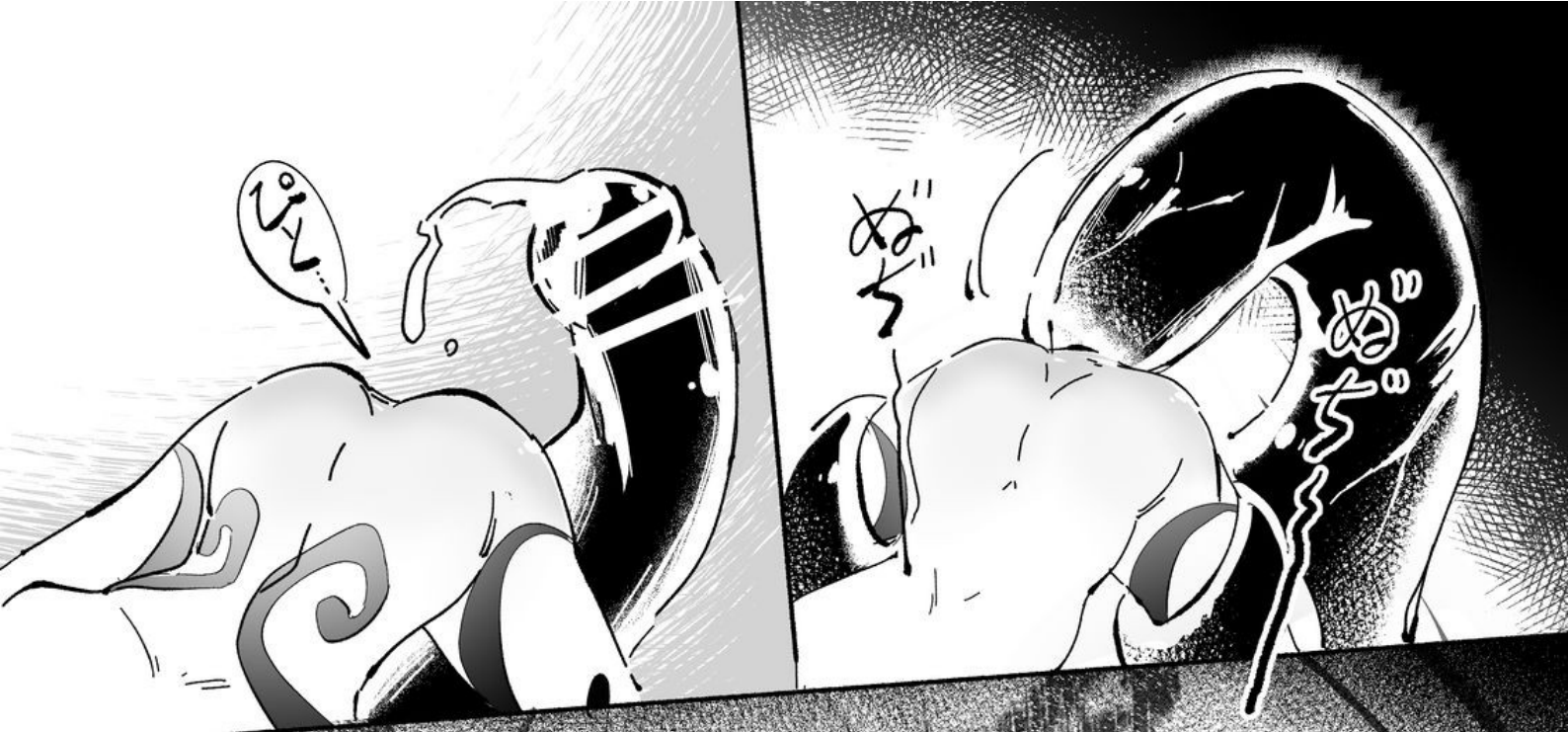
巨大な触手がアナルを当て、噴出される液体を止めているようにも見える。



先ほどの柔らかい触手より、さらに大きく、固くなっている。触手はじわじわと腸内を進み、肉穴も少しずつ開かれてゆく。少年の体は中から絞られ、体く字のように反り返ってしまう。



ずぶっと、巨大な触手が入り、一気に奥まで突き入れた。腹部が内から強い衝撃を受け、強烈な痛みが少年を襲い、気絶させた。



玉石状の精英を穴に入れた後、触手は力が抜けたように落ちた。この精英はかなりの大きさで、固い外殻に棘がはえていて、直腸口にぴったりハマて、固定されている。

少年が異物を排出しようとして筋肉を使ったら、精英の棘に刺されてしまう。少年の力が尽きると、精英内壁の収縮とともに奥まではいっていく。こうした失神と目覚めの繰り返しは、卵が着床するまで2週間もかかる。

少年賛生

孕妊—三之章

触れただけで人を欲情を起こさせる聖水、今は少年の全身に行き渡っている。知覚が鈍くなり、不安になってゆく。

顔が熱くなっているが、手足は凍り付くような冷たさだった。股間は反り立っているままで、先端にチクチクと針が刺さっているような痛みを感じる。浮力と縄のお陰で、少年はなんとか上半身を直立させていて、息をづいている。



触手の外殻が軟化され、痛みが圧迫感に変わっていき、括約筋が少しずつ拡張されていく。

なんかさされた外殻に亀裂が入り、それが卵が育ったことを意味している。

少年の体が強く震えた後、ゼリー状の粘液が噴出される。排泄の勢いで少年が刺激され、絶頂させてしまう。粘液の排出と共に、白濁液が先端から噴出している。

精液をかけられた粘液が活性化され、それが無数の触手になり、少年の足を掴んだ。



触手は精液を求めて、少年の足を固定し、竿を根っこごと引き抜くような勢いで吸い付く。

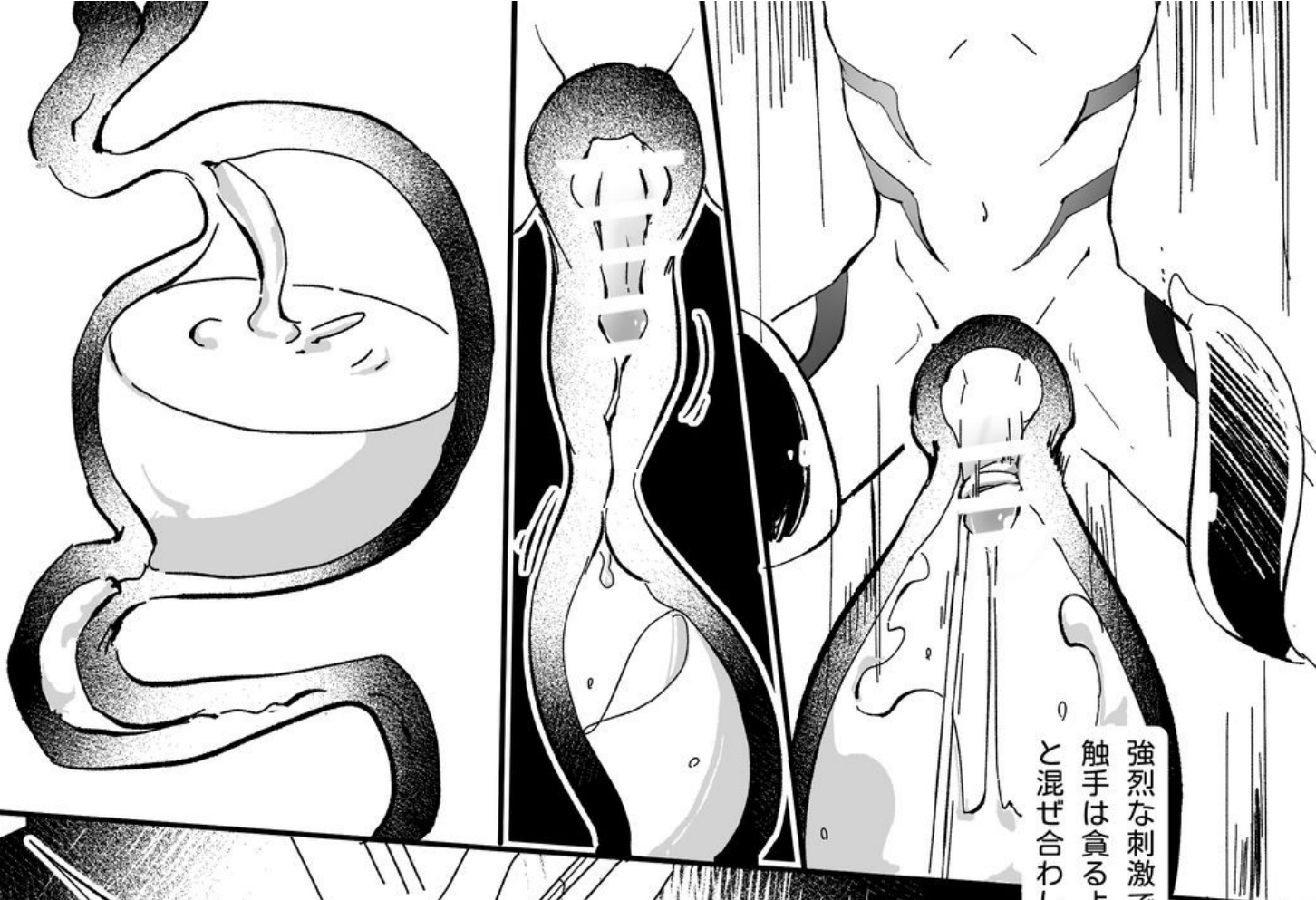
強く刺激された少年の陰茎は、求めているのに再び反り立ってしまう。

触手の中で細い組織が、正確に尿道口を見つけ、中に侵入していく。道を沿って陰囊まで辿り着き、何らかの毒液を注入させた。



温かく、湿った感触に包まれ、陰囊も圧迫されている。直腸も侵入されていて、のそのそと動いている。下半身から始め、少年の冷たかった体は徐々に熱くなっていく。

と思いきや、パッと尿道の触手が
一気に引き抜いた――



強烈な刺激で精液が洪水のように噴出した。
触手は貪るように精液を搾取し、自身の体液
と混ぜ合わせ、少年の肛門に注入する。

受精率を高めるために、この作業は繰り返して
行っ。卵に辿り着けなかった精子は養分として
吸収される。言わば出産するまでは、少年は自
分自身の体液を浴び続けることになる。





陰嚢に注入された毒液が作用し続け、精液の
産出量も段々増えていく。2週間立たずとも
、毎回の射精が1時間も続く。

9

大量の精液は触手の嚢に一定量溜めた後、一気に腸
内に注入されていく。襲ってくる快感に少年の陰
茎が反応し、先端の触手もそれを応じるように動い
ていく。

自分が自分に犯されているように、快感からは逃げ
たくとも逃げられない。息をつく間は失神する間だ
けになっている。

少年贅生

餌給—第四章—

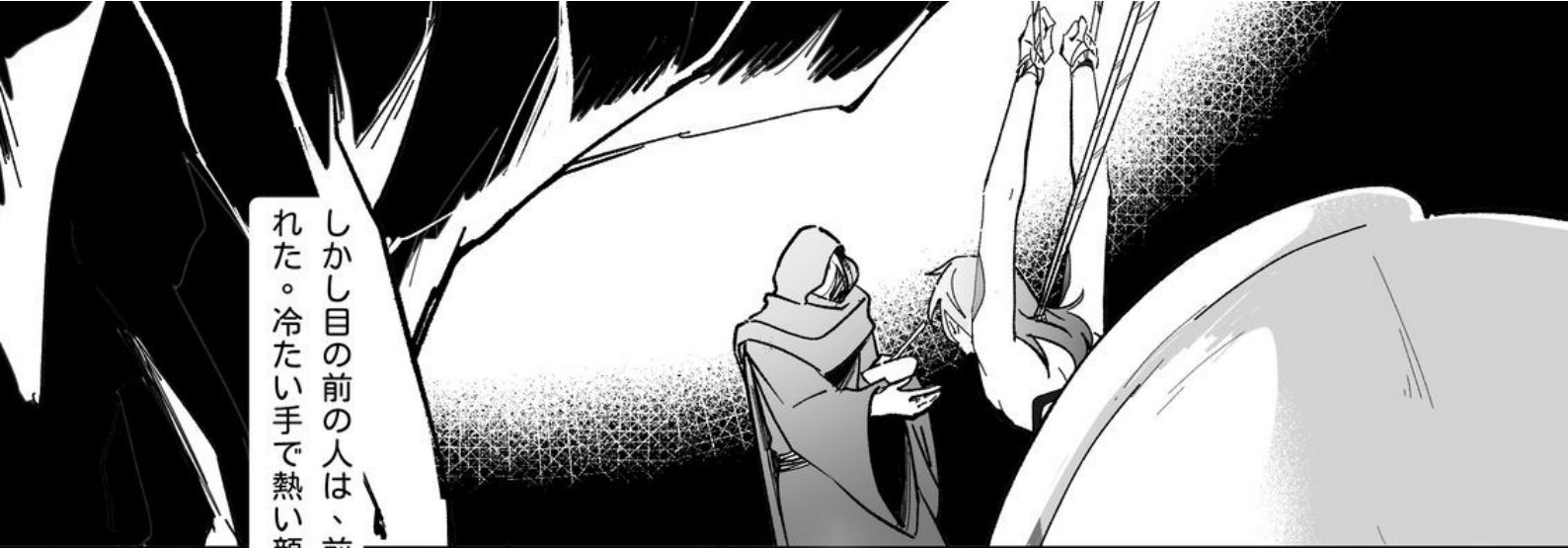
少年は苗床として、栄養を与える役割もある。
定期的に食事を与えられていて、その同時に
幼体の発育を確認することもできる。

卵の成長を邪魔させないために、少年は神殿の最深部に幽閉されている。日の当たらない場所で監禁され続け、時間感覚が失われてしまい、ただ犯され、イカされ続けるだけ。

食事の時間が時間の進みを体感できる唯一の行為だ。一食を終えたら、解放される日に近づいたと感じる。その為、少年には毎回の食事が待ち遠しくなる。



食事中、少年は依然犯されている。彼は目を閉じ、恥ずかしさで頬を赤らめる。突然パツと体が震え、絶頂を迎える。目の前の人はずっと無表情で佇んで、作業的に食事をさせるだけだった。



しかし目の前の人は、前触れもなく少年の頬を触れた。冷たい手で熱い顔に冷たさを与えた。



優しく、安心させるような感触



なぜあんな悲しそうな顔をしているのだろう？



なぜ……



妊孕4ヶ月目。成長した幼体が臓器を圧迫している、少年に多大な不快感を与えている。栄養の供給を維持するために、巨大な山羊の角できている筒を少年の喉に入れ、強制的に栄養を摂取される。

窒息させないように、栄養の補給は数回分けて行う。少年は嘔吐感を我慢しながら、絶頂し続けるしかない。



6ヶ月目、力を失った触手は壺の底に沈んでいて、もう刺激を与えることができない。それでも、胎動と伴う痛みは少年を震わせる。出産日が近づいている。

少年贅生

第一章 降生



幼体の降臨を拝めるために、少年は高い位置に吊るされている。遠方を眺めているようにも見える少年は、意識が朦朧としていて、体の痛みすべてどうでもよくなってる。

じゃーっと、触手のかけらが羊水と共に噴出された。出産の始まりである。



穴から一本の触手が頭を出し、干からびた触手は空気に触れると生氣を取り戻したように膨張し、うにようによと外を出たがっている。少年は意識を取り戻し、ひ弱い体が刺激で震えている、巨大な触手がはすぐに下の容器を満たしてしまう、しかし少年の腹部はまだまだ膨張しているまま。腹の中の物が全て排出されたら、どれだけ壮観な光景になるだろう。



発育が早い幼体が大きな体を持っている。苗床の中で絡め合い、栄養を奪い合っていた。生き残った個体は死骸吸収し、さらに強くなっていく。妊娠の中期になると、それぞれ独立していた触手が融合した、それぞれに脳があったが、お互いを繋がって、一番強い個体の意識に従っている。その結果、融合した触手が蛸のような形態をしている。



触手は少年の腹を押しつぶし、ついに、一番大きな個体が産まれた。 予想以上の結果だ、人の子を器にして誕生せし神霊よ、いまだ生存本能に動かされている、力を持った肉塊だとしても、いずれは自意識を芽生え、我が一族を繁栄に導くのだろう。



少年贄生

章之六—供養

神靈を産む出した体は、聖物として祀られ、信徒たちに口づけ、拝められている。長時間聖水に漬けられた少年は、汗から聖水の成分を放出し、強烈な匂いを発して、信徒たちを狂わせていく。



触手の行動は繁殖の本能に動かされている儀式の一環であれば、人間たちの行動は少し感情を含まれている。人々は少年の体を好き勝手弄んで、優しかった愛撫も段々エスカレートしていき、乱暴になっていく。

少年は必死にもがいている。触手に開発し尽された体は、乱暴にされていても快感で震えてしまう。しかし少年は自分の微かに残っている意識に苦しんでいる。生贄に選ばれ、言葉も奪われ、信仰の入れ墨を入られた少年は、一緒に生活していた同族に、欲望の捌け口にされている。



意識を失っていても、体は信徒たちの欲望を応えていて、信徒たちに絶頂に迎えさせている。少年は時々目を覚めてしまい、声にならない悲鳴を出す、その後またすぐに気絶する。供養の終わり際に、少年はもう悲鳴を出さずに、ただ突かれているリズムと同調して喘いでいる。

疲れ切った彼は、欲望の跡が体にまみれている。あの人は最後の少年に最後の食事をさせ、体を拭いてあげている。明日は供養の日である、少年は神の元に帰り、苦難はついに報われる。

少年贄生

贄生七章

儀式は肉体を蹂躪し、同族たちの凌辱が精神を破壊した。神の施しでも、凡人の欲望でも、心を無にして受け入れれば、快楽を得られるでしょう。

ああ、また入られている。少年はもう抵抗しようとせずに、ただそれを受け入れるだけ。



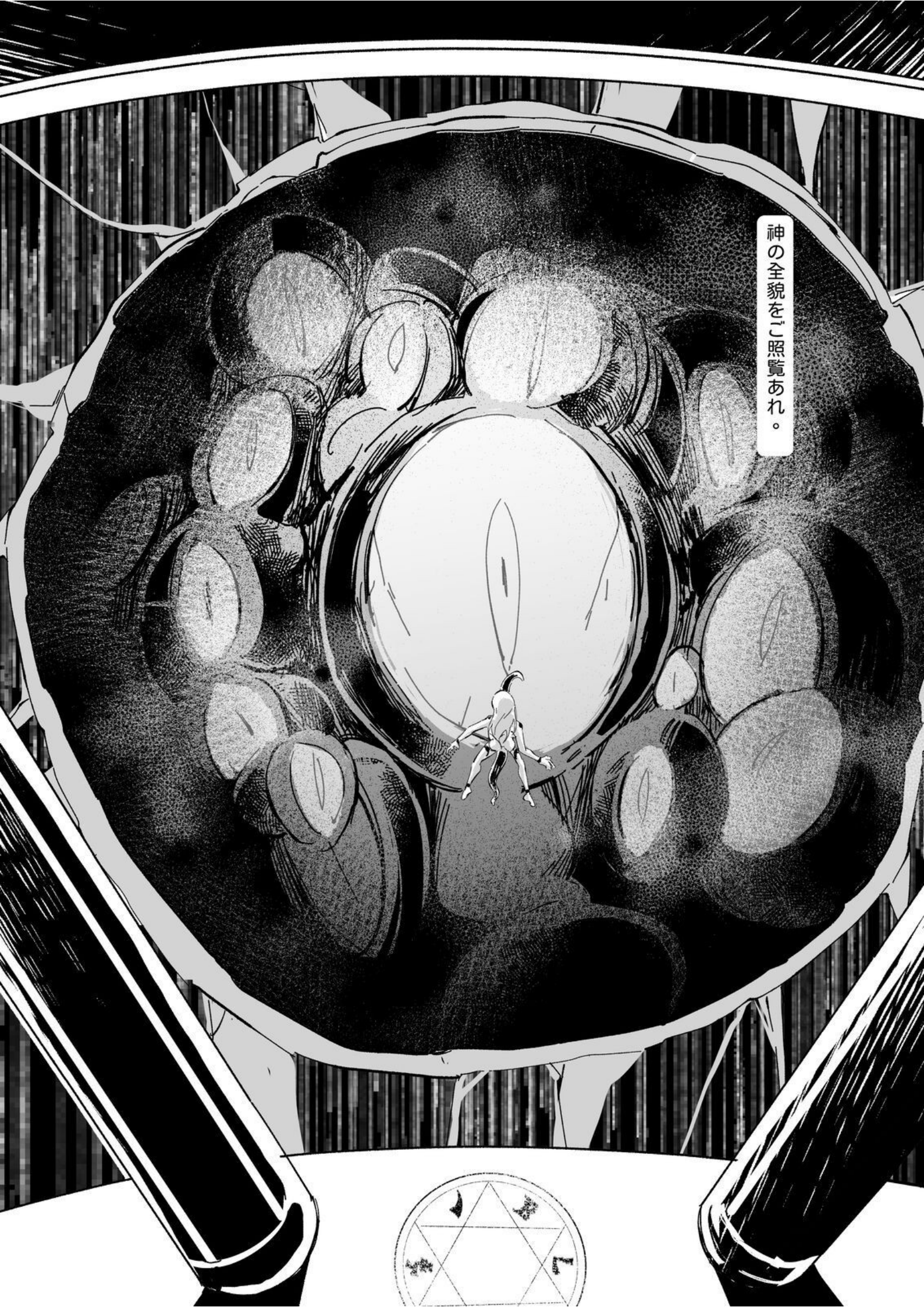
ついに、少年は貫かれる。

それは、人間が耐えられぬ痛み――

人間が耐えられぬ快楽――

彼を導く――

神の全貌をご照覧あれ。





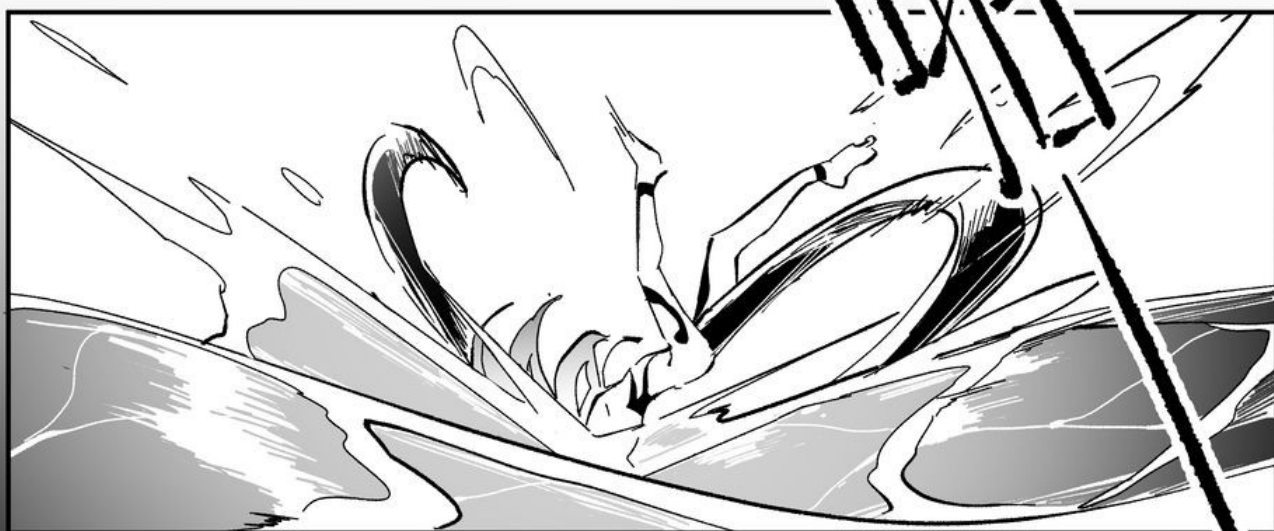
我が子よ、我の元へ。

我に命を捧げよ――



与えよう、苦痛から安らぎを、

死から――



永生を。



西大陸・聖堂
大災禍後――

消化される前に滅亡を迎えたのか？
しかし、なぜ王族が……

西大陸の伝統、
人で神を育つ。

後継者を求めていたのだろう。

王族の血が神に
一番近いとされている……

……何をしている？

生贄として死なれなかった彼に、
人間として安息させたい。それも
私が司祭としての務め。

手早く済ませろ、
ちょっと向こう見てくる。

ええ。

ちっ

後書き

少年が色々ヤバイことされる本でした。皆様はどう思われたのでしょうか？生贄少年第一回、触手でできるプレイを全部やりました。でも、その土地に他の神性がいるとしたら、きっとほかの儀式もあるだろうなーっと、色々考えてしまいます。妄想が広がりますね！

というわけで、今後ともよろしくお願いいたしますvWv

by Y泥



バイバイ～





生贄少年by Y 泥. 2022.5.

[PLURK ID: River0401 | PIXIV: 69152922 | CXC: Y 泥 ㄋ 窩]

日本語翻譯: 神祈數位